

家庭学習応援教材

夏目漱石「猫の墓」を読む

早稲田大学 国際教養学部 2012 過程の演習 新国語問題集アシスト【現代文編】

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

早稲田へ移ってから、猫が段々痩せて来た。一向に小供と遊ぶ気色がない。日が当たると縁側に寝ている。前足を揃えた上に、四角な顎を載せて、じつと庭の植込を眺めたまま、いつまでも動く様子が見えない。小供がいくらその傍で騒いでも、知らぬ顔をしている。小供の方でも、初めから相手にしなくなった。この猫はとても遊び仲間に来ないと云わん許りに、旧友を他人扱いにしている。小供のみではない下女はただ三度の食を、台所の隅に置いてやるだけでそのほかには、ほとんど構いつけなかった。しかもその食はたいてい近所にいる大きな三毛猫が来て食ってしまった。猫は別に怒る様子もなかった、喧嘩をする所を見た試しもない。ただ、じつとして寝ていた。しかしその寝方にどことなく余裕がない。伸んびり楽々と身を横に、日光を領しているのと違って、動くべきせき(注1)がないために——これでは、まだ形容し足りない。懶さの度のある所まで通り越して、動かなければ淋しいが、動くとなお淋しいので、我慢して、じつと辛抱している様に見えた。その眼つきは、いつでも庭の植込を見ているが、彼は恐らく木の葉も、幹の形も意識していなかったのだろう、青味がかった黄色い瞳子を、ぼんやりひと所落ち付けているのみである。彼れが家の小供から存在を認められぬように、自分でも、世の中の存在を判然と認めていなかったらしい。

それでも時々はあると見えて、外へ出て行く事がある。するといつでも近所の三毛猫から追っかけられる。そうして、怖いものだから、縁側を飛び上がって、立て切つてある障子を突き破つて、囲炉裏の傍まで逃げ込んで来る。家のものが、彼れの存在に気がつくのはこの時だけである。彼れもこの時に限って、自分が生きている事実を、満足に自覚するのだろう。

これが度重なるにつれて、猫の長い尻尾の毛が段々抜けて来た。始めはどこどころがぼくぼく穴のように落ち込んで見えたが、後には赤肌には抜け広がって、見るも気の毒な程にだらりと垂れていた。彼れは万事に疲れ果てた、体軀を押し曲げて、しきりに痛い局部を舐めた。

おい猫がどうかしたようだなどと云うと、そうですね、やっぱり年を取ったせいでしょうと、妻は至極冷淡である。自分もそのままにして放つておいた。すると、しばらくしてから、今度は三度のものを時々吐くようになった。咽喉の所に大きな波をうたして、嘔とも、しゃくりともつかない苦しうな音をさせる。苦しうだけども、やむをえないから、気がつくときと表へ追い出す。でなければ畳の上でも、布団の上でも容赦なく汚す。来客の用意に拵らえた八反(注2)の座布団は、おおかた彼れのために汚されてしまった。

「どうもしようがないな。腸胃が悪いんだろう、宝丹でも水に溶いて飲ましてやれ」

妻は何とも云わなかった。二三日してから、宝丹を飲ましたかと聞いたら、飲ましても駄目です、口を開きませんという答をした後で、魚の骨を食べさせると吐くんですと説明するから、じゃ食わせんが好いじゃないかと、少し嶮どんに叱りながら書見をしていた。

猫は吐気がなくなりさえすれば、依然として、おとなしく寝ている。この頃では、じつと身を竦め

るようにして、自分の身を支える縁側だけが便であるという風に、いかにも切り詰めた蹲踞まり方を
する。眼つきも少し変って来た。始めは近い視線に、遠くものが映ることく、悄然たるうちに、ど
こ落ちつきが有ったが、それが次第に怪しく動いて来た。けれども眼の色は段々沈んで行く。日が
落ちて微かな稲妻があらわれる様な気がした。けれども放っておいた。妻も気にもかけなかったら
しい。小供は無論猫のいる事さえ忘れていた。

ある晩、彼れは小供の寝る夜具の裾に腹這になつていたが、やがて、自分の捕った魚を取り上げら
れる時に出すような唸声を挙げた。この時変だなど気がついたのは自分だけである。小供はよく寝て
いる。妻は針仕事に余念がなかった。しばらくすると猫がまた唸った。妻はようやく針の手をやめた。
自分は、どうしたんだ、夜中に小供の頭でも囁られちゃ大変だと云った。まさかと妻はまた襦袢の袖
を縫い出した。猫は折々唸っていた。

明くる日は囲炉裏の縁に乗ったなり、一日唸っていた。茶を注いだり、薬缶を取ったりするのが気
味が悪いようであった。が、夜になると猫の事は自分も妻もまるで忘れてしまった。猫の死んだのは
実にその晩である。朝になって、下女が裏の物置に薪を出しに行った時は、もう硬くなって、古い竈
(注3)の上に倒れていた。

妻はわざわざその死態を見に行った。それから今までの冷淡に引き更えて急に騒ぎ出した。出入の
車夫を頼んで、四角な墓標を買って来て、何か書いてやって下さいと云う。自分は表に猫の墓と書い
て、裏に此下に稲妻起る宵あらんと認めた。車夫はこのまま、埋めても好いんですかと聞いている。
まさか火葬にも出来ないじゃないかと下女が冷かした。

小供も急に猫を可愛がり出した。墓標の左右に硝子の罌を二つ活けて、萩の花をたくさん挿した。
茶碗に水を汲んで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替えられた。三日目の夕方に四つになる女の
子が——自分はこの時書齋の窓から見ていた。——たった一人墓の前へ来て、しばらく白木の棒を見
ていたが、やがて手に持った、おもちやの杓子をおろして、猫に供えた茶碗の水をしゃくって飲んだ。
それも一度ではない。萩の花の落ちこぼれた水の瀝りは、静かな夕暮の中に、幾度か愛子の小さい咽
喉を潤おした。

猫の命日には、妻がきつと一切れの鮭と、鰹節を掛けた一杯の飯を墓の前に供える。今でも忘れた
事がない。ただこの頃では、庭まで持って出ずに、大抵は茶の間の簞笥の上へ載せておくようである。

注1 せき……積。容積のこと。当時の東京の俗語。「せきがない」で、余裕がない、の意。

注2 八反……通常より大きめの座布団のサイズ。

注3 竈……台所の煮炊きするかまど。

問 この文章を書いた著者の思いを説明する記述として内容に合致するものを次のア〜カから二つ選
ぶ。

ア 著者は猫の死を叙しながら、死なれてみて存外に自分の心に堪えるものであった悲嘆を、死
の瞬間の一瞬の生の輝きに託して切々と描いている。

イ 著者は飼う猫が弱っていく間は冷淡であった妻や子どもたちが、死んでから急に騒ぎ出し、
墓まで作ったことに、人生の皮肉を見てとっている。

ウ 著者は飼う猫の弱り、死んでいくさま、またその死が引き起こす家族の反応をひとしなみに

平常心のうちに同情をもって記述している。

エ 著者は飼い猫が家族の冷淡のうちに死んでいったこと、自分も結局は無関心であったことにかすかながら哀れであったという後悔の念を抱いている。

オ 著者は、猫の死とその猫の墓の前で示された幼子の所作に人生のうちに起こる死と生の交錯を見、清澄な感慨を覚えている。

カ 著者は、猫が死んだ後、家族の者がひとときわ関心を示し、やがて忘却していくようであるさまを、人生のごく自然ななりゆきとして、ユーモラスに描いている。

【解説】

◇本文の構成

猫の具合が悪くなる

←

猫を巡る妻との会話

←

猫の墓を巡る家族の様子

【解答】

ウ・カ

筆者は猫にも、家族にも、感情的にならず、事実を淡々と描写している。しかし、そこに細やかな観察眼が働き、冷たく突き放した感じはない。したがって、ウが○。

カは、「やがて忘却していくようであるさま」が、命日に妻が忘れずに備える飯椀が、この頃墓まで持って行かなくなったことを根拠にできる。「ユーモラス」については、例えば、筆者夫婦や車夫、下女の会話の軽いタッチや、「小供も急に猫を可愛がり出した」など、猫は死んでいるのであるから、ちょっとおもしろい表現であるし、飯椀が簞笥の上に乗っている様子も、供え物だけにおかしみがあり、根拠は挙げられる。カだけが、このエッセーの結末部分、主題に触れている。